



東京会場に入る土光会長（中央）とその左東芝・高瀬専務、アーチャー・マッケンジー氏（イギリス元駐チュニジア大使）

## 1979年度 国際産業人会議開催

五月十一日から十三日にかけて新緑の箱根強羅ホテルで、続いて十四日には東京の憲政記念館で「世界のギャップをうめる産業界の役割―正しい解決の前提条件としての相互信頼―」をメインテーマに第三回国際産業人会議が盛大に開催された。

今回、海外からはアーチャー・マッケンジー氏（イギリス元駐チュニジア大使、元国連公使）ネビル・クーパー氏（イギリス元駐スタンダード電話電話会社取締役）、マリオ・コスタ氏（イタリア元コスタ船舶会社社長、テッド・アーチャー氏（オーストラリア店員労組役員）など十三カ国二十四名が、また日本側は土光敏夫氏（経団連会長）宮田義二氏（日本鉄鋼労連会長）、中山伊知郎氏（一橋大学名誉教授、高木文雄氏（国鉄総裁）、砂野仁氏（川崎重工相談役）など、経営、労働界、学識経験者、東芝労使代表など延五百名が参加して意欲的な論議が展開された。

海外代表らは会議の前後に、日産自動車座間工場、東芝府中工場、日立製作所大みか工場、国鉄新幹線指令室などを見学した。福田前首相、園田外相など政府関係者、与野党各党の国会議員、そして総評、同盟など労働界代表との懇談も頻繁に行なわれた。

関西経団連日向会長、大阪商工会議所佐伯会頭、九州経済界への訪問も生まれ、各企業及び労働組合での招待講演も含め、「世界と日本との間のギャップ」を埋める精力的な活躍がなされた。





東京会議で所信をのべるテッド・アーチャー氏（オーストラリア）



司会する柳沢錬造氏（参議院議員）



開会に先立ってMRA国際クラスが披露された

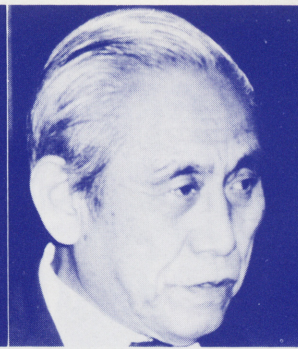


会議終了のあと懇親会が開かれた。挨拶する  
マリオ・コスタ氏（イタリア・コスタ船船会社社長）

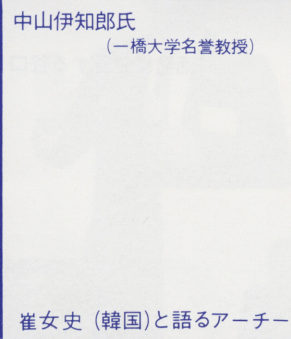
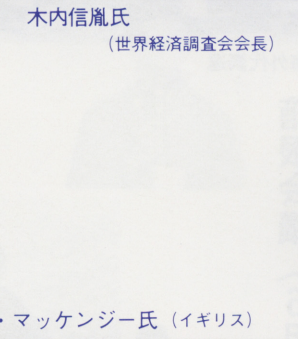
東京会議（5月14日・於憲政記念館）から



ゴードン・ワイズ氏  
(イギリス・MRA理事長)



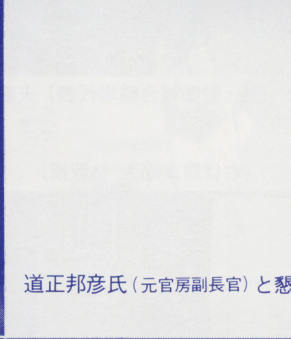
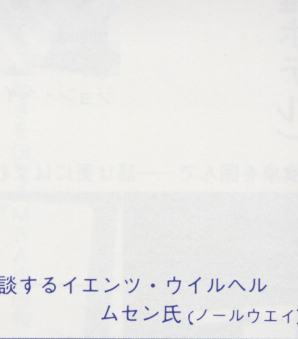
中島正樹氏  
(三菱総研・会長)



クリスチャン・ニールセン  
社取締役  
ウイリー・レンツマン氏  
(デンマーク)



ステイヴ・デイキンソン氏  
(アメリカ・MRA理事)



赤城海助氏  
(日通・副社長)



テッド・アーチャー氏  
(オーストラリア・店員労働組合交渉担当役員)

ネビル・クーパー氏  
(イギリス・スタンダード電信電話会社取締役)

滝山 養氏  
(国鉄・技師長)

佐藤 実氏  
(東芝労組副委員長)

トシュトン・ヘンリックソン氏  
(スウェーデン・キルナ鉱山運輸会社取締役)





熱心に同時通訳に聞きいる海外代表達



活発に発言する谷口ジャスコ人事部長

箱根会議  
 (6月11日・12日・於強羅ホテル)  
 から



ジョン・ペイト (英・労働組合職場代表) 夫妻と金森茂一郎氏 (近鉄・専務) 夫妻

共に食卓を囲んで——話は更にはずむ (右は熊本商大 林教授)





# 国際産業人会議 世界のギャップをうめる産業の役割 INDUSTRY'S WORLD RESPONSIBILITY FOR BRIDGING THE GAPS



卒直な意見交換と貴重な提言がなされた会場風景  
(右下、発言する横浜市大 鷲見助教授)

世界の正しい動きを伝えるMRA出版物



「夫婦喧嘩」をユーモラスに唄うトリオ  
・(岡本典子さん、住友裕郎さん、住友昭郎さん)





# 相互理解と信頼を更に深めた数々のイベント

一行を迎えて挨拶する梅原東芝労組副委員長、

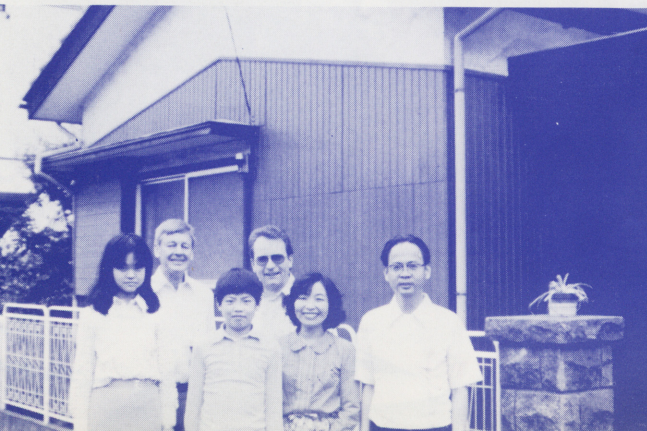
その左 高瀬専務 右端は 佐野府中支部委員長



渡された白衣と帽子にちょっとびっくり、そして感心



訪れた梅原副委員長宅前で御家族と記念のスナップ、ミタッグ氏 (ドイツ) とレイセン氏 (オランダ)



東芝芝翠荘の皆さんと感謝と交歓のときをもつ一行





国際産業人会議  
 世界のギャップをうめる産業の役割  
 INDUSTRY'S WORLD RESPONSIBILITY FOR BRIDGING THE GAPS



午餐会が憲政記念館で開かれた  
 手前一人おいて渡辺武氏（日米欧委員会日本委員長）  
 アーチャー・マッケンジー氏、法眼普作氏（国際協力事業団総裁）

今回の海外代表の中には四組のご夫妻が含まれていて互いに協力して会議を盛り上げる姿が目立った。前頁のジョン・ペイト夫妻（イギリス）、そして上からデビット・バントン夫妻（香港）、ニケトウ・イラル夫妻（インド）、トム・ユレーン夫妻（オーストラリア）。

トム・ユレーン氏は、オーストラリアのピーコック外相からの次のような会議宛メッセージを読みあげられた。

「日本の各界からのご参集と伺い、私からの「あいさつ」を伝え、また会議のご成功を心からお祈り申しあげます。

豪日関係がただ単に政治や貿易の面にとどまらず、両国間の関係を多様化し広範化していく努力を続け、社会的文化的領域にも広がっていくことが不可欠と存じます。これは政府関係機関だけでは達成できず非政府関係組織が果たす大きな役割があると存じます。」



箱根・東京会議を通じて海外そして日本の代表双方より数多くの  
所信が表明されましたが、ここにその内の一部をご紹介致します。  
なお十二ページにご案内しましたように、参加者それぞれのスピ  
ーチを収録し一冊の本にまとめ発刊致しますので是非ご覧下さい。

## 土光敏夫氏

(経団連・会長)

私たちは過去にいろいろな問  
題について議論してまいまし  
たが完全に解決できたという問  
題は非常に少ないのです。こと  
に毎年問題の数はふえ、かつま  
たその重要さも増しています。

単に首脳会議を開いた。そこで  
解決できるという問題はないの  
です。いまマッケンジーさんが  
云われたように、問題はお互い  
の真摯な了解、アンダースタン  
ドで解決する。その条件として  
MRAの四つの原則に帰らざる  
を得ないと思うのです。平常、  
先進国間の経済の問題、その他  
を議論しますときには、各国の  
経済代表が自分の立場に立つて  
発言される。聞く方も相手のい  
うことをアンダースタンディン  
グするために討論するのではな  
く、これにどう対応していくか  
ということに対して非常に心を  
使っているのが実情であります。  
こういうことでは結局いかに議

論しても、いかにまた精緻な数  
字をもとに話し合っても、結局  
のところ解決はむずかしい。わ  
れわれ経団連におきましても、  
ともかく抽象的な批判はこれぞ  
やめようではないか。われわれ  
としてほんとうの問題は何か  
ということを実際問題につい  
て具体的にお互い研究しよう、  
そしてほんとうに要求を真剣に  
考えていく。たとえば輸入問題  
についても、日本がこれでは完  
全でないというのであれば、そ  
の具体的な問題についてわれわ  
れも研究し、日本が少しでも悪  
い、相手に不信を与える節があ  
るならばわれわれとして向こうの  
立場に立つて交渉しようという  
ことでいま忙殺されています。  
それは結局MRAの条件にはま  
ることです。向こうの立場に立つ。  
日本自身の立場を考えるだけでな  
く、戦術をろうすることではなく、  
平等に相手のことを考えるとい  
うことよって遂次解決されて  
くるものです。問題はECとの

間にもたくさんあります。EC  
の各国間にもたくさんあります。  
われわれはそれを真剣に一つ、  
あるいは二つ、ほんとうに先方  
の立場に立つて、先方の考えに  
基いてこの解決に当るならば必  
らず道は開けるといふことを経  
験したのであります。相手は直  
接われわれに対して前のような  
厳しいことはいわれないというこ  
とを経験したのであります。経  
済問題だけでなく、国家間には  
いろいろ問題があります。その  
意味におきましてほんとうにM  
RAの四つの原則に立つてわれ  
われがやっていくならば、いま  
世界でのいろいろな問題が順次  
少なくなると思えます。

## 高瀬正二氏

(東芝・専務取締役)

第二次世界大戦後の一〇年間  
においては、労使間が激しいイ  
デオロギー的対立の中で、文字  
通り倒産の危機に直面したので  
あります。今日の心ある労使は  
当時の轍を二度と踏んではなら  
ないと深く自戒しているわけ  
であります。労使は鏡のようなも  
のでありまして、お互いの相手  
の中に自分の姿を写しているの  
であります。帰するところは人

と人との深い信頼関係が、良好  
な労使関係を築く鍵であると思  
うのであります。政労使の關係  
を考えるにあたって、比喩的  
に申しあげるならば同じ土俵に  
登ることがギャップを埋める第  
一步だと思われたいであります。

同じ土俵の上に立つときに初め  
て、立場の異なる者の間に相互  
理解が生まれ、対立から対話へ、  
そしてそれを一歩進めて真の協  
調関係が育ってくるものと思  
うのであります。ブックマン博士  
の『誰が正しいかでなくて何が  
正しいか』ということばは実に  
含蓄の深いすばらしいことばだ  
と思っております。

当社の労使交渉の場でもこの  
英知に満ちあふれたことばがし  
ばしば登場していることを御紹  
介いたします。

## ネビル・クーパー氏

(イギリス・スタンダード  
電信電話会社取締役)

世界に多くあるギャップの中  
で、一つは言動のギャップでは  
ないでしょうか。いうこととや  
ることの差、われわれがお互い  
同士うまくいかないのも、自分  
自身は自分の掲げる理想をもっ  
て尺度とし、他人はその行動を  
もってはかるからではないでし

ようか。ある人が応用、実践し  
ない議論だけを口で話すとい  
うことは献立表を食べて、ほん  
とごちそうにありつかないこ  
とだといっていました。

英国と日本のことについて申  
しあげたいと思います。来日  
いたします前に、英国の経団連T  
DIとそれから経営者団体の人  
たちと話をしてみました。日本  
に対する対日批判というか、苦  
情というものは多分に誇張され  
ているとその人たちがもってい  
ました。むしろ英国としては、  
日本に行つて日本で売る努力を  
なすべきだと。たまたま日本に  
来ている英国の会社の代表もい  
つてましたが、日本の経団連が  
非常に良い助けをしてくれた。  
逆に英国側としては経団連初め  
土光さんに対する理解のなさ、  
それから礼儀のなさというのを  
非常に恥かしく思います。

問題が全部なくなるものでは  
ないと思います。願わくばお互  
いに対する礼儀正しさを、それか  
ら理解ということよって解決  
できる。自分の問題だけを吹聴  
するのではなくて、相手の立場  
に立つて。その人の心でものを  
考えていく、日英両国が歴史的  
にあつた両国の關係をもう一度



新しいものにする、深いものにするということを私は期待してやみません。

アメリカとヨーロッパと日本が一緒になって産業界のために新しいパターンをつくっていくことができないものでしょうか。そこに働く者にとって満足のいく社会、そして社会に受け入れられるやり方、人類の物心両方のニーズを満たしているような生き方、これが探せないものでしょうか。

### テッド・アーチャ氏

(オーストラリア・店員労組交渉担当役員)

具体的な事例をお話ししてみたいと思います。MRAとは何か、絶対道義標準に照らし合わせて聞くこと、聞いたことを実践すること、これだと思えます。

ある朝、私ははつきりした考えが浮かびました。経営者に対して、われわれの労働組合が抱えている問題を卒直に話して、労使のトップ会談を頼んだのです。その信頼と正直さという上で労使の会議をもつことができました。最初、経営者のトップと正直に話し合うということと組合の書記長に話すと「そんなことはできるものか」といって

ました。「経営者なんか信頼するに足りない。話しても無駄だよ」というのです。「いや、これは神様からきた考えに相違ない。自分はやるつもりだ」と私は答えました。翌朝、彼が戻ってきて「誰かがどこかで始めなきゃ、この行き詰りはとけない、経営者のトップに話してみよう」というのです。これは奇蹟的な変化だったと思います。そのときはすでにロックアウトが三週間続いておりまして聞くところによると日本の毛織産業界はオーストラリアからの原料供給がないので非常に困っているということでした。このトップ会議で問題は解決し、組合の苦情も取りあげられ解決したのです。そのあとわれわれの産業界では全くロックアウトによる休業というものはありません。

### 木内信胤氏

(世界経済調査会・会長)

いろいろ困難な問題に直面して、ぜひともその解決の道を得たいと願うとき、情報を集め、意見を交換し、いろいろと対策を工夫するといった通常の手段の積みあげが必要であることは申すまでもありませんが、それ

だけではまだ足りない。何か一つ、ひらめきのようなものに接しないとだめだと思ふときがあります。そのひらめきはどうすれば得られるのでしょうか。この強羅で得られた一つの思想と

いうのはそのことについてであります。(中略)このひらめきはどうしたら得られるかです。無心の境地に立つて自他双方のために祈るという気持ちに立つた上で情報を集め、意見を交換し、対策を工夫する。それは通常の場合に行うことと全く同じです。全く同じですが、心のうち方が右にいう無心の祈りというものに近いものであれば、多くの場合、突然、解決の方法を思いつくということになるのです。MRAの精神は四つの絶対

正直、純潔、無私、愛の四つに徹しろということでありますが、このMRA精神に立つて、自他双方のために真剣に考えるとき、しばしば前記にいうひらめきが得られるのです。それによるのでなければ、いまの世界の多くの困難な問題を解決する道は得られないのではないのでしょうか。

### トシュトン・ヘンリックソン氏

(スエーデン・キルナ鉱山運輸会社取締役)

私はコーのMRAの会議に出席し、そこで心の声を聞く、しかし四つの絶対標準に照らすと

いうことを学びました。私の会社は産業が国营化された後、私はそこに残らなければならぬと思ひ、いろいろ新しい秩序の導入がありました。自分ではなかなかそれを納得して受け入れることができなかったのです。それからそこで鉱山用のトラックを一つ発明するという考えを持ちました。そんなものを生産するのは不可能だという人が多かったのです。しかしこの考えはいわゆるひらめいた考えだと思ひました。今日では世界の五大大陸にこの鉱山用のトラックは売られております。

### ステイブ・デイキンソン氏

(アメリカ・MRA理事)

アメリカの国にとって一番大切なことは、世界各国の利益を追求する基礎として、道義的な礎を築くことだと思ひます。あまりにも多くの場合、過去にこの道義の名のもとに、自分の国の利己心を追求してきたと思ひます。他国との関係において変えなければならぬことを知りながら、道義という隠れみのの

もとに、それをなござりにしてきたと思ひます。アメリカの国の根底に、他国が受け入れられるようなしつかりとした道義の基礎というものがなければ、他国との関係でいいものが作られるはずはないと思ひます。「だが正しいかでなくて、何が正しいか」という原則は、産業の基礎となるばかりでなく、国の基礎になるべきだと思ひます。

### ニケトウ・イラル氏

(インド・MRA理事)

私自身は山岳の少数民族からきておるものですから、いわゆる発展したインドの中心からきている人たちがいつも責め立てておりました。私たちは抑圧された少数派からきているので多数派からきている人たちを責めることが正当である、その権利があるのだと思ひわけです。しかしあるとき、私は、小さいところからの出身者である私も大きな任をとって、自分自身の人びとを陥れた、そういつたまずい点を自分の方で変えていかなければならないと思ひました。そう決心したときにそういつた恨みつらみや人を責めたてることが



ら自由になり、同時にはつきりと人びとに物事が云えるようになり、相手も非常に尊敬して受けとめてくれることを感じました。

### アーチー・マッケンジー氏

(イギリス)

元駐チユニア大使、元国連公使

日本に戻ってまいりまして、三つの点で私は勇気づけられております。一つは日本の産業界のトップの方がたが、箱根の会議のテーマであった産業界のギ

ャップをどう埋めるか、その役割について熱心に話し合われたという点です。二番目は、実業家の方がたばかりでなく、労組の方がた、老若男女の方がたが世界の問題に答えるために、自分の生活でいろいろ新しい生き方をされている方が非常にふえているという点です。第三番目は日本の政府が、第三世界の人的資源開発のために日本は応分の役割を果たすという言明をされた点です。具体的にどのようなことがされるかということとは私は存じません。英国がやってきた間違いを繰り返さないでほしいということだけをお願いしたいと思えます。何千人、何万人という第三世界から学生たちが学

びに英国に来ております。確かに技術の熟練を彼らに与えたいでしょう。しかし多くの場合、彼らの人生の目的を与えること、または道徳的な問題に答えを与えることができなかったのです。で、その結果、留学生たちはマルキストになって、または道義的に退廃して、あるいはその両方になって国に帰るといふ結果を招来したのです。日本はぜひ第三世界の学生のうちに、技術を習得せしめるばかりでなく、人生の哲学、そして彼らの世界、また世界全体を新しい方向に導いていけるような力を与えてほしいと思えます。

### ゴードン・ワイズ氏

(英・MRA理事長)

マニラで開かれたUNCTADの会議の席上で大平首相は、二年前の福田総理の言明されたことを引用されています。当時、福田総理は、日本は軍事大国にならない、ASEAN諸国並びにアジアの諸国と手を携えてやっていくのだということをおわられたわけですね。日本の軍事的な問題に関して他国人の私がとかくいうことはないと思えますが、一言、ブックマン博士のこ

とばを引用したいと思えます。「国の最上の国防は、近隣諸国の尊敬と感謝である」と。これはすべての国においていえることだと思えます。この福田総理のいわれた心と心の触れ合いの外交、これは日本とアジア諸国との関係のみに限定されるものでなく、土光会長もいみじくもいわれたように、日本とヨーロッパ、日本とアメリカ、または日本とオーストラリアの関係にもいえることだと思えます。それは持てる国と持てる国との間の関係ということがあるわけですね。なぜならば通常、国家間の緊張が緩和されなければ、一番打撃をこうむるのは貧しい国だからです。木内先生よりMRAはどのように具体的に実践すればいいかというお話がありましたが、要するに心と心との関係をどうつくるかという点だと思えます。MRAを始められたブックマン博士が初めて来日されたのは一九一五年のことですけど、その時に「人はいつも相手の変わるのを待っている。国も他の国が変わるのを待っている。みんながだれかが変わるのを待っているのだ」ということを言われました。まず自分から

変わることを、自分の国から変わらなければならぬということをお教えてくださったわけですね。一つの例証を引いてみたいと思えます。

昨年の初め、オーストラリアのフレイザ首相が外交問題顧問のグリフィスさんに、オーストラリアの外交問題で一番深刻な問題は何かと聞いたとき、グリフィスさん(長くMRAをやってきている同志です)は「一番大切なことは、日豪関係の基礎を築いたのは二十四年前だが、日豪関係を今後さらに強化する一役を首相みずから買わなければならない」という進言をしました。当時、福田さんがアメリカのカーター大統領に会われることになっていたわけですが、福田さんが日本を離れる前にぜひ会見した方がいいと提案したのです。そのときフレイザ首相とグリフィス顧問は来日したわけですけれども、単なるオーストラリアの首相の訪日ということにとどまらなかつたわけですね。なぜなら四日間の日本滞在の間に貿易通商問題ということを一回も発言しなかつたからです。むしろフレイザ首相の胸のうちにあつたのは、日本の問題をど

うやってオーストラリアが助けられるかということと、それから世界の新しい経済秩序を打ちたてるために日豪両国に何ができるか、その点を追求するということだったからです。新しい秩序というのは、すべての国が何かを与え合うことではないもので、国が変わるのを待つのではなく、自分の国から始めなければ、新しい秩序はできないのです。もしお互いに自分の心を与え合えば、信頼の関係ができます。信頼の関係が新しい通商のパターンをつくれるわけです。

### 中山伊知郎氏

(一橋大学名誉教授)

途上国の発展をわれわれと一緒にやっていくようになるまでは、私は世界の経済も、世界の平和もほんとうに確立されないのではないかと思います。よくいわれますように日本は幸か不幸かその問題に全力をあげなければならぬ。そういう状態まで大きくなった。大きくなったということ、あるいは経済が深くなつたということ、これは同時にその責任を負わされていることなのです。この責任を自覚

途上国の発展をわれわれと一緒にやっていくようになるまでは、私は世界の経済も、世界の平和もほんとうに確立されないのではないかと思います。よくいわれますように日本は幸か不幸かその問題に全力をあげなければならぬ。そういう状態まで大きくなった。大きくなったということ、あるいは経済が深くなつたということ、これは同時にその責任を負わされていることなのです。この責任を自覚



しないで次の世代に生きていくことはできない。その意味におきまして私は公平無私、そしてほんとうに人間的なつき合いでこの世界をつくっていかうというMRAの理想というものは、まさにこの途上国を引き入れた、世界のもっと大きなインテグレーションのための新しい哲学ではないかと思うのです。哲学と申しまでも、むずかしい論理的な意味の哲学でなくて、実践的な、実行できる人間の哲学ではないかと思うのです。

## 中島 正樹氏

(三菱総研・会長)

日本の軍事費の支出、防衛費と申しております。その防衛費の支出は一パーセントに満たない。GNPの〇・九パーセントでございます。ヨーロッパの主な国の四分の一程度でございますし、アメリカに比べれば八分の一ぐらいであります。またソ連に比べれば十分の一でございます。これはどういふことかと申しますと、日本は毎年三百億ドルをセーブできるわけです。おかげで日本の国民の税金負担率は、ほかの国に比べますと十パーセントないし二十パーセ

ント低いのでございます。これは確かに日本の国際的なお金が余る一つの原因になっているのではないかと思います。

しかし、これをさらに冷静に考えますと、この金を、人類の平和のために効果的に使うという可能性をもっていると思うのです。最近は何連の中でも発達のための軍縮ということに新しい動きが始まっております。もしそうならば、日本はその目的からみれば第一の資格性のある国じゃないかと思うのであります。もちろん日本は、ほかの国から攻撃される危険をもっております。これを防ぐためにはその安全の保障料を払わなければなりません。日米安保条約はもちろんその一つでございますので、そういう意味では私はアメリカに対する日本の保険料の支払いが少な過ぎると思うのであります。それにしても日本は海外協力のためにもっと多くの金を使えます。とくに、第三世界の発展の協力のために、そしてまた先ほど私は知らなかったのではありませんが、ワイズさんがブックマン博士のすばらしい言葉を知らせてくださいました。私はかねがね日本の安全保障は軍備で

はなく、精神的な海外からの日本に対する好意だけが日本を防ぐ最大の道だと思っておりますが、それをブックマン博士がいつてくださった。せめて尊敬を得ないまでも感謝を受けるだけのことをすることが、この日本の平和憲法を守る最も重要な問題だと思えます。

## マリオ・コスタ氏

(イタリア・コスタ船舶会社社長)

いわゆる純潔ということに關しましては、われわれのコスタ家の中にある動機というものは、まさに同じ動機であるべきという意味から解釈ができます。われわれ一家だけのことではなく、地域のことを考えるということであり、個人の成功や個人の栄達、地位を求めめるだけではいけません。

MRAの考え方を、こういうふうに適用的のだというふうな話をするのではなく、高い英知というものを求め、それに徹し、それを示すことによって発展するわけです。われわれの一家の中の調和が従業員に広がり、組合にも広がり、顧客にも広がり、さらに世界へと広がるわけ

です。私の家には六人子供がおりま

すが、やはり主婦というものが家庭の雰囲気づくりに大きな影響があると思えます。何か家庭に問題が起きたときに主婦の間違いだとはいわないことです。私の経験から申しますと、たいしてそういった問題というのは、私の方に非があったということがほとんどであります。

## ハンリッヒ・カラー氏

(スイス・コー産業人会議事務局長)

世界中の人間が全部スイス人のようによく働らけば、世界はもっとよくなるとスイス人は考えています。しかし実際には、世界のいろいろな問題に対して答えを与えようとしていないで、われわれスイス人は非常に利己的な生活をしていきます。私自身がそういう人間なのです。

実業家の一人息子であった私は、学生時代にMRAに会い、自分の生活にとつて非常に大きな挑戦でした。自分の心の声に聞いて、それに従うということになったら百八十度の転回をしなければならなかったのです。

スイスの実業家の息子、のんきで利己的で怠けものの息子を

誰だつて変えられると思いません。私の父は千人の従業員のいる会社を持っておりました。私は当然その父の後を継ごうと思っております。ところが先ほどから言われております高いところからの英知、その心の声に聞いたときに、他に自分に対する計画があることを悟りました。過去二十八年間、私は無報酬でMRAのために働いております。そのうえ私の両親から受け継いだ遺産の大部分もMRAにつき込みました。

スイスは、ご承知のようにわりに頭のいい人間が産業に従事しております。これは経営側にも労働側にもおります。新しい市場を獲得し、新しい製品を創造し、生産をあげて利潤を追求しようとしています。けれども、なことだけれども、目的が小さ過ぎると思えます。世界中の何千万、何億という人びとに、衣食住の必要なものを与えるべきだと思っております。世界のいろいろな問題、精神的にも物質的にも間違っている問題について答えを与えていくことが、日米欧それぞれ産業界に働く者の役割りだと信じております。



## 三日間にわたる論議 の集大成を発刊!

今回の産業人会議は現代世界の当面する南北の経済構造、先進工業国間のギャップ、労使の対立といった最大の問題を捉えたこと、また親子の断絶、家庭不和といった身近かな解決をせまられる問題もとりあげられたことから、かつてない熱のこもった論議が展開されました。

しかもその内容が単なる評論や批判にとどまらないで発言者の経験を交えた確信や事例が他の国際会議にはみられない貴重なものばかりであったことから、参加者の一部からぜひ議事内容を全部集録して一冊の本として家族や社員にも読ませたいという希望が寄せられました。これに 대응してこのほど事務局はその編集にとりかかることにいたしました。

した。内容は司会者の言葉を除いた発言者の発言内容、その略歴で、A4判で二百ページを越えるものとなります。価格は一部一、〇〇〇円(送料別)とします。発行は九月下旬の見込みですがお申込みいただければ、完成次第お手許にお届けいたします。お申込みは左記にお願いいたします。

記

〒11511

東京都渋谷区代々木一五七  
一二 ドルミ代々木三〇八  
国際MRA日本協会内

産業人会議事務局宛

1979年度

## MRA世界大会への招待

会期 一九七九年七月十四日〜九月三日

会場 スイス・コー

マウンテンハウス

私達は皆こうしたもの間にギャップのあることを知っています。

富める者と貧しい者、

先進国と発展途上国

両親とティーンエイジャー

経営者と労働者

黒人と白人

しかしながら、それらのギャップを埋めるためには先づ次のようなギャップから片付けねばなりません。

私達の唱える民主主義の理想と、大目に見がちな政治や経済の現実擁護、すべきと主張する道徳、そして精神的な価値と日々白日に曝されるスキヤングルの数々

どのようにあるべきだという姿と実際の私達の姿とのギャップ。

個々人そして社会的グループがこれらのギャップに立ち向い、自身に欠ける点を直視し、神の下にそれらを解決しようとする時に、ギャップは埋められるでしょう。その時に指導者に対する一般民衆の冷笑は消え、また、指導者達の選挙民への冷笑も消え去ることでしょう。

分裂と偏向の増長する世界において、ギャップを埋める術は、生存のための術となりました。



マウンテンハウスの全景